ELGAR

Jugend
Philharmoniker
18

2024.3.10
MUZA Kawasaki Symphony Hall

jugend
philharmoniker

ごあいさつ

本日は、ユーゲント・フィルハーモニカー第18回定期演奏会にご来場いただき誠にありがとうございます。

今回の演奏会は「オール・エルガー・プログラム」となりました。イギリスを代表する大作曲家、エルガーの名前を知らない人はほとんどいないのではないでしょうか。「愛の挨拶」や英国第二の国歌とも言われている「威風堂々第１番」は大変有名でクラシックを普段聴かない方でも一度は耳にしたことのあるメロディーではないかと思います。エルガーというと親しみやすい明快なメロディーを思い浮かべる人が多い一方で、交響曲第1番やチェロ協奏曲はどこか内省的で「大人な」味が持ち味の曲だと感じます。今日はそんな多彩な顔を持つエルガーの作品の世界観にじっくりと浸っていただけましたら幸いです。

ちなみにイギリス人と日本人は「島国育ち」という点で似たような国民性を持つと言われているそうです。自分が悪くなくてもとりあえず「Sorry」と謝ってしまうところ、オブラートに包んで物事を伝えがちなところ、お茶やカツカレーが好きなところ……そんな似たような国民性を持つ日本人にとって、エルガーは親しみやすい作曲家の１人かもしれません。

今回で3回目の共演となる指揮者の橘直貴先生はイギリス音楽に半生を捧げてきたというほどの無類のエルガー好き。エルガー愛の溢れるリハーサルではとても楽しい時間を共有することができました。また、チェロ協奏曲では東京都交響楽団副首席チェロ奏者の江口心一先生をお迎えします。第一次世界大戦による心の傷から立ち直ったエルガーが晩年に書き上げた美しい傑作を江口先生と共に演奏できることを心より嬉しく思っております。

最後になりましたが、橘先生、江口先生をはじめ、本演奏会の開催にあたってご協力いただきました皆様、そしてご来場いただきました皆様に、心からの御礼を申し上げます。今後とも当団の活動に対して引き続きのご期待と変わらぬご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願いいたします。

ユーゲント・フィルハーモニカー 代表
三宅雅也

ユーゲント・フィルハーモニカー
第18回定期演奏会

2024年3月10日（日）　12:45開場／13:30開演

ミューザ川崎シンフォニーホール

プログラム

E.エルガー：

序曲《コケイン》 Op.40

Cockaigne Overture, Op.40

チェロ協奏曲 ホ短調 Op.85

Cello Concerto in E minor, Op.85

交響曲第1番 変イ長調 Op.55

Symphony No.1 in A-flat major, Op.55

チェロ独奏＝江口心一　　指揮＝橘 直貴

本日の演奏会はカーテンコールを撮影いただけます。撮影に関しては以下のルールを守っていただきますようお願いいたします。

・スマートフォン、携帯電話以外のカメラでの撮影、三脚等のご使用はご遠慮ください。
・フラッシュの使用はお控えください。
・撮影の際、手を高く上げるなど周りのお客様のご迷惑になる行為にご注意ください。
・自席にご着席のまま撮影をお願いいたします。
・SNS等に投稿いただく際は、他のお客様の写り込みにご注意ください。
・SNSに投稿いただく際は、ハッシュタグ #ユーゲントフィル #jugendphil をつけて、コンサートの感想をお願いいたします。

指揮　橘 直貴

札幌市出身。1988年桐朋学園大学音楽学部にホルン専攻として入学。1992年同大学卒業後、研究科に進み、1994年より1997年まで同大学の付属機関である指揮教室に在籍する。この間、指揮を岡部守弘、紙谷一衛、黒岩英臣の各氏に、ホルンを安原正幸氏、チェンバロを鍋島元子氏に師事する。また、大学在学中より、シエナ・ウィンドオーケストラに入団、1995年4月まで同団のホルン奏者を務める。大学卒業後から現在に渡り、ウィーン国立音大助教授である湯浅勇治氏の指揮セミナーに参加、師事する。1999、2001年ウィーン・マスタークルゼ指揮マスターコースにてサルヴァドール・マス・コンデ氏に、2000、2003、2004、2006年イタリアのムジカ・リヴァ夏期国際アカデミー指揮マスターコースにてイザーク・カラブチェフスキー氏に、また2001年ドイツのシュレスヴィッヒ・ホルシュタイン音楽祭指揮マスターコースにてヨルマ・パヌラ氏に師事する。2001年第47回ブザンソン国際指揮者コンクール・ファイナリスト、ならびに会場内の聴衆による投票にて最優秀である聴衆賞受賞。同年に、オーケストラ・レジオナル・ドゥ・カンヌと、2006年のサンクト・ペテルブルグ・フィルハーモニーと共演。2007年第2回バルトーク国際オペラ指揮者コンクールにて優勝。これまでに、東京交響楽団、東京シティ・フィル、東京室内管弦楽団、札幌交響楽団、仙台フィル、広島交響楽団、関西フィル他に客演、各地のオーケストラ、合唱団やオペラの指揮者として活動。現在、東京室内管弦楽団のプリンシパルコンダクター、コンセール・エクラタン福岡の音楽監督を務めている。

独奏　江口心一

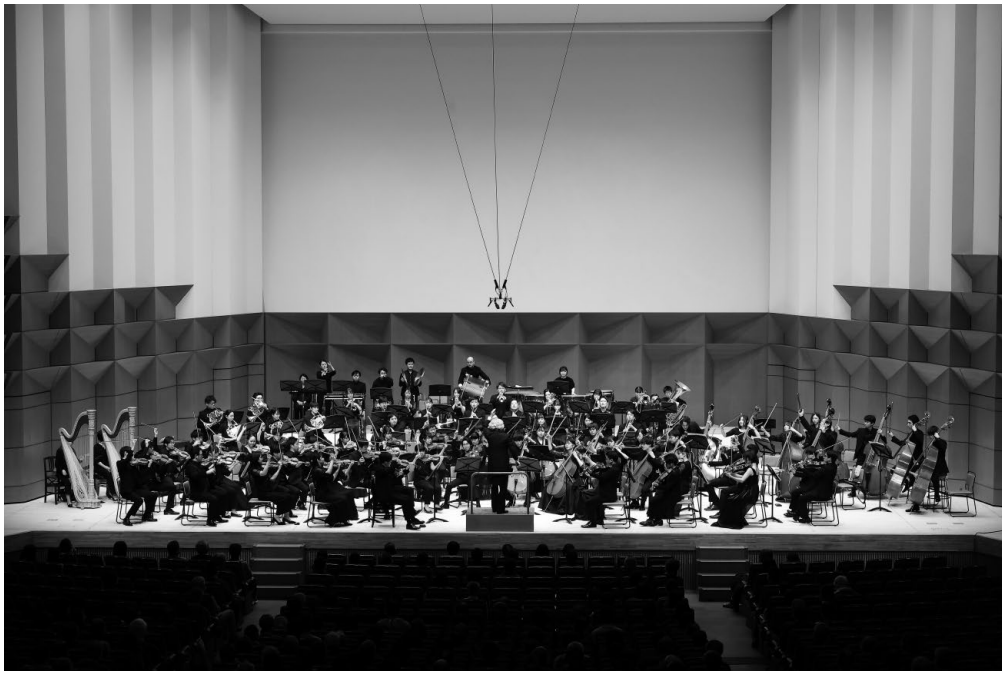
3歳からヴァイオリンを始める。8歳でチェロに転向。11歳、12歳の時スズキメソードのテンチルドレンの一員としてニューヨークのカーネギーホール、シドニーのオペラハウスなどを含むアメリカ、オーストラリア、ヨーロッパ各地のホールで演奏をする。1991年桐朋女子高等学校音楽科(男女共学)を卒業後ベルギーのブリュッセルに留学。1992年フランスのパリ国立高等音楽院に首席で入学。1997年パリ国立高等音楽院で一等賞（プルミエプリ）を獲得。2000年1月より東京都交響楽団団員。現在、同交響楽団副首席。ピアノとのデュオ「The DUO」、弦楽三重奏「菖蒲」、ピアノトリオ「東京トリオ」、「トリオナチュール」、「ローズタウントリオ」、弦楽四重奏「Ambition Quartetto」を結成するなど室内楽にも力を入れ、ソロ活動に関してはソロリサイタル、コンチェルトなどこれまでに数々のコンサートで演奏している。ピアノ五重奏団Mercedes ensembleのメンバー稲本 響が音楽監督を務める映画、「長い散歩」、「イキガミ」、「スープオペラ」、「星守る犬」、大河ドラマ「どうする家康」の中で流れるチェロも演奏している。これまでにヴァイオリンを安田広務、チェロを佐藤満、松波恵子、Gilbert ZANLONGHI（ジルベール・ザンロンギ）、Jean-Marie GAMARD（ジャンマリ・ギャマール）、Patrick GABARD（パトリック・ギャバール）、Mark Didier THIRAULT（マーク・ディディエ・ティロー）の各氏に師事。

リリースされたCD

「ヴァイオリンとチェロのための二重奏曲集」「ジャパニーズチルドレンズソング・ヴァイオリン＆チェロ」「20世紀の無伴奏チェロ作品」

「和」CELLO ～無伴奏作品集～ 「日本弦楽三重奏曲の世界」「日本弦楽三重奏曲の世界２」

2017年7月 Dialogue ～涙の理由～　2019年12月 メンデルスゾーン：ピアノ三重奏曲 第1番＆第2番（東京トリオ）



©Traverse Photo Ltd.

ユーゲント・フィルハーモニカー

一般財団法人日本青年館と全日本高等学校オーケストラ連盟の音楽行事（全国高等学校選抜オーケストラフェスタ、全日本高等学校選抜オーケストラ・ヨーロッパ公演、日本ユンゲオーケストラ・ヨーロッパ公演）に参加したメンバーが中心となって2006年3月に創設された。全国各地の高校や大学オーケストラ出身のプレイヤー約80名が集まり、3月の定期演奏会を中心に、福祉施設や普段生のオーケストラに触れる機会のない農村への訪問演奏、地方公演、行楽施設の各種イベントやテレビ番組での依頼演奏など幅広い活動を行っている。音楽的に、そして人間的に成熟した団体作りに励みながら、「アマチュア・オケだからできること（≒プロオケには出来ないこと）」を追求している。

今期の活動

2023年

6月17日　デイ・ホーム弦巻（世田谷区）［弦楽四重奏］

9月16日　第4回特別演奏会（神奈川県立音楽堂）

G. ロッシーニ：歌劇《ウィリアム・テル》序曲
L.v. ベートーヴェン：ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 Op.61
F. メンデルスゾーン：交響曲第3番 イ短調《スコットランド》Op.56
ヴァイオリン独奏＝佐久間聡一　指揮＝安斎拓志

9月23日　星峠の棚田 稲刈りイベント（新潟県十日町市）［弦楽四重奏］

10月28日　松代小学校150周年式典（新潟県十日町市）［オーケストラ演奏、小学生のマーチングバンドとの共演］

2024年

1月27日　デイ・ホーム弦巻［弦楽四重奏、木管五重奏、管楽合奏］

曲紹介

E.エルガー：序曲《コケイン》Op.40（1901）

「ある曇った日にロンドンの市庁舎にいると、遠くから高貴な旋律が聞こえてくるような気がしました」――1900年11月、エルガーは友人に書き送った。その「高貴な旋律」が彼に、陽気でロンドン風の演奏会用序曲《コケイン（ロンドンの街にて）》の着想を与えた。「コケイン」とはロンドンの古い呼び名である。そしてこの序曲は、エルガーの創作全体を特徴づける「ノビルメンテ（高貴に）」という発想標語が彼のオーケストラ譜に記された、最初の作品となった。*

エドワード・エルガー（1857～1934）は、イングランドのウスター市近郊の町で楽器店を営む家庭に生まれ、1889年に結婚しロンドンに移住するまでをウスターで過ごす。音楽に囲まれて育ち、幼い頃からピアノやオルガンを弾いたほか、地元のアマチュアオーケストラではヴァイオリンを弾いた。オーケストラや小さなアンサンブルのために、ヴァーグナーやベートーヴェンの名曲を編曲する、というのも、若きエルガーの役割のひとつだった。都会とは言えない土地に生まれ育ったエルガーが、音楽院や大学での教育なしに英国を代表するオーケストラ作曲家となったのには、プロフェッショナル、アマチュア問わず音楽を愛する人々と交流を持ち、たくさんの楽譜を読み書きし、楽器を弾き、ときには修理まですることで積んだ豊かな知識と経験が土台となっている。

序曲《コケイン》は1901年3月に完成し、6月にエルガー自身の指揮でロンドンにて初演された。入れ替わり立ち替わり現れるさまざまなテーマが、活気に満ちたロンドンの街を描く。生意気なロンドン子（コクニー）、公園をそぞろ歩きする恋人たち、軍楽隊の奏でる行進曲。ざわざわとした情景の浮かぶ導入部のあとに奏される息の長いフレーズに、エルガーは「ノビルメンテ」を記した。

彼はこの序曲を「英国のオーケストラの団員である多くの友人たち」に捧げ、初演後に楽譜を指揮者のハンス・リヒターへ送っている。「ここには深さやメランコリーはありません。表現しようとしたのは、誠実で、健康で、ユーモアがあって、強く、それでいて下品ではないことです。」同年10月、リヒター指揮ハレ管弦楽団によりマンチェスターで演奏された。リヒターとハレ管弦楽団は、7年後にエルガーの交響曲第1番を初演する。

＊オーケストラ作品をのぞけば、エルガーの楽譜に「ノビルメンテ」が初めて書かれたのは、《エニグマ変奏曲》（1899）より〈ニムロッド〉のピアノ編曲版である。

チェロ協奏曲 ホ短調 Op.85（1919）

第一次世界大戦後に書かれたチェロ協奏曲は、《コケイン》や交響曲第1番とは様相をまったく異にしている。1918年のはじめにエルガーはメニエール病を患い、めまいや頭痛に悩まされていた。戦争勃発当初こそチャリティーのための作品を書くなど活動していたものの、

ドイツの同業者や支持者たちがみな「敵」となったという事実は、エルガーの心身の快復も、筆の進みをも阻んだ。1918年3月、繰り返し炎症を起こす扁桃を取り除く手術をし、退院した晩、のちにチェロ協奏曲第1楽章のチェロ独奏の主題となる9/8拍子の旋律を書き留めている。

その後、戦時下でインフレーションが進むロンドンを離れるべく、5月にサセックス州の別荘へ引っ越し、日曜大工や庭仕事に明け暮れる日々を過ごす。そうして再び創作意欲を取り戻したエルガーが翌1919年6月に完成したのが、チェロ協奏曲である。10月にフェリックス・サモンドの独奏、ロンドン交響楽団、エルガー自身の指揮で初演された。初演自体は稽古不足で失敗に終わったものの、現在ではドヴォルザークと並んで世界的に最も演奏されるチェロ協奏曲のひとつとなっている。

力強いアルペジオではじまる冒頭のチェロ独奏には、やはり「ノビルメンテ」の指示がある。2つの主題からなる幻想曲、とも言うべき自由な形式の第1楽章に、軽やかで高い技術の求められるスケルツォ（第2楽章）が続く。60小節という短くも密度の高い第3楽章では、控えめなオーケストラの伴奏に寄り添われてチェロが歌い上げる。最終楽章でオーケストラの短い序奏に続くチェロのレチタティーヴォ（朗唱）風の独奏には、ふたたび「ノビルメンテ」の文字が。第3楽章の主題がたっぷりと繰り返されたのち、第1楽章冒頭のアルペジオが回顧されたかと思うと、一気に突き進むようにして幕切れとなる。

交響曲第1番 変イ長調 Op.55（1908）

これからの交響曲はどのようなものであるべきか、交響曲を作曲することはそもそも時代遅れなのか、という議論は、世紀転換期のヨーロッパの音楽界に尽きなかった。1905年12月、バーミンガム大学の講義でエルガーはこのように語っている。

> 私は、標題のない交響曲こそ、芸術の最も発展したかたちであると考えます。[…] リヒャルト・シュトラウスという今日最も偉大な天才が、自身の素晴らしい業績には交響詩がふさわしいと認めているせいで、物書きのなかには、交響曲は死んだと断言する向きもあります。おそらく、現代の交響曲にはその有効性を証明するものもまだあるのに、その形式をただ称賛し、間違ったやり方で使う者によって台無しにされているのかもしれません。しかしながら、いざ天才が現れれば、交響曲の完全なる復帰も望めるのではないでしょうか。

この時点でエルガーはまだ交響曲を書いていないが、交響曲というジャンルの重要性を認めていることは明らかである。英国を代表する作曲家としてすでに確立されたエルガーの地位が、交響曲の失敗によって、あるいは交響曲を作曲する事実だけによって、失われてしまうかもしれない、という強いプレッシャーのなかで語られたこの言葉には、重みと、どこか

人間味もある。

1907年の初夏、エルガーは新しい交響曲の冒頭を書き留めた。その後中断を経て、翌1908年の夏を丸ごと費やし、9月に完成。スコアは「真の芸術家、真の友人ハンス・リヒター」へ捧げられ、12月にリヒター指揮、ハレ管弦楽団によってマンチェスターで初演された。その3日後には、同じくリヒター指揮、ロンドン交響楽団の演奏で、ロンドンでも披露される。ロンドン響のリハーサルを始める前に、リヒターは楽団員に向かってこう言ったという。「これから稽古するのは、国内に留まらず現代最高の作曲家による、現代最高の交響曲です。」マンチェスターとロンドンの初演はいずれも大成功で、とりわけロンドンでは喝采が鳴り止まず、エルガーは5回もカーテンコールに出なければならなかった。その後の1年間で、世界中で約100回にもわたって演奏された。

前述の講義でエルガーは、標題のない音楽、すなわち絶対音楽を至高のものと捉えた。交響曲第1番に標題は無いものの、何も描かれていないとは言い難い。「慈愛に満ちた人生の幅広い経験と未来への大いなる希望を超えたところに、標題などありません。」――エルガーがまた別の友人に語ったこの交響曲についての一言は、謎めいているようで、一度演奏を聴けば腑に落ちるような気がする。

低弦楽器の歩みのリズムと、木管楽器とヴィオラの息の長い旋律で始まる第1楽章は、「ノビルメンテ・エ・センプリーチェ（高貴に、そしてシンプルに）」と指示される。この旋律こそ、交響曲に繰り返し現れ、作品全体を貫くイデー・フィクス（固定楽想）である。ざわめくような次の主題は《コケイン》を思わせる。第2楽章は、ヴァイオリンの16分音符の落ち着かない主題と、フルートとクラリネットの口笛を吹くような軽快な主題からなる。終わりへ近づくにつれ、ヴァイオリンの主題がゆったりとリズムを変えて現れ、第3楽章の主題へと変容していく。

リヒターも称賛したアダージョ（第3楽章）は、エルガーの最高傑作のひとつである。クライマックスで、ホルンに導かれるようにして弦楽器によって切々と歌われる跳躍7度の旋律は、実はこの交響曲の楽想のなかでもっとも早く、1904年の夏にすでに作曲されていた。第4楽章は、ゆったりと神秘的にはじまり、弦楽器の上行音階とともにアレグロへ移ると、夢からはっと覚めたように突き進んで行く。それまで顔をのぞかせるだけだったイデー・フィクスが再び現れ、まずは管弦楽器によってとうとうと歌われ、オーケストラ全体に引き継がれると、輝かしいクライマックスとなる。

中村伸子（音楽学・元団員）